

京都大学	博士 (教育学)	氏名	里村 生英
論文題目	音楽経験を通じたスピリチュアルケア—ミュージック・サナトロジーの検討を通して		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、緩和ケアの一領域である「ミュージック・サナトロジー (music-thanatology)」の検討を通して、「死に逝く人へのケア」における「音楽経験」の持つ意味を考察した研究である。「ミュージック・サナトロジー」は、終末期にある人のベッドサイドに寄り添い、ハープの音と歌声を通して、死に逝く者とその家族のニーズに応える臨床実践であり、1970年代半ば、現代のホスピス運動と同時期に米国コロラド州で始まった。</p> <p>序論は、本研究の背景をなす「ケア研究の動向と課題」を示し、ミュージック・サナトロジーの源泉となった最初の事例を提示した。</p> <p>第I部は、ミュージック・サナトロジー実践の分析である。</p> <p>第1章は、ミュージック・サナトロジーが、今日いかなる社会的実践として発展しているか、その経緯、実践状況、研究動向を示した。</p> <p>第2章は、筆者自らの実践 (ハープ訪問) を通して日本の現状を確認した。本人及び家族、担当看護師へのインタビューをもとに質的分析を行い、死に逝く人への「ケア」とは、つながり (関係性) を回復する中で、深みと大いなる無限性に開かれていく動き (変容) が生じるケアであるとの仮説を提示した。</p> <p>第3章は、米国における調査を手がかりに、ケアを行う側 (医療スタッフ) の語りを検討した。「医療ケアとしてのミュージック・サナトロジー」、「音楽による施設の雰囲気の変化」に注目し、重要な論点として、「つながりと意味を深める」こと、「全人格に共にある」こと、「成長を促す」教育的な側面などを指摘した。</p> <p>第4章は、第I部のまとめである。日本と米国の臨床実践を比較検討し、「死に逝く人へのケア」における重要な論点として、①つながりの変容が生じること、②見えないけれども感じられるもの・触れられるものが意識されること、③ケアされる人とケアする人の「共にある」関係性という点を示した。</p> <p>第II部は、ミュージック・サナトロジーの思想的基盤に関する研究であり、11世紀クリュニー修道院の「看取りの慣わし・儀式」が検討される。</p> <p>第5章は、クリュニー共同体の生活を概説した後、看取りの慣わしの内容を『慣習書』に即して精査した。看取りの慣わしは、①死に逝く修道士を中心とし、②修道院の全員が関わる営みであり、③儀式として進められることが示された。</p> <p>第6章は、看取りの慣わしを「ケアの様態」という視点から確認した。①死に逝</p>			

く人を囲み共同体が祈り詠唱すること、②死に逝く人を独りにすることなく注意深く看守ること、③臨終の合図と共に全員が駆け付け最後の瞬間にその場に居ること、④詠うこととそのひびきはそこに居るすべての者を癒し結びつけこと。こうした点において、現代のミュージック・サナトロジーへの影響を確認した。

第7章は、クリュニー修道院の理念を「ケアの思想的枠組み」の観点から考察し、①人間が肉体と魂の統合的存在であること、②死は「いのちの新しい局面」のはじまりであること、③肉体と魂の二重のケアを通して平安に移行を助けることの重要性を確認した。

第8章は「ケアの方法論的基礎」の視点から検討し、①「儀式」という形態、②「つながり（関係性）の回復・深化」としてのひびき・音楽、③日々の生活の「観想的」在り方の重要性を確認した。

第Ⅲ部は、ミュージック・サナトロジーの創設者シュローダー＝シーカーの言説を手がかりに、その方法論を検討した。

第9章は、ミュージック・サナトロジーのキーワードとして、「観想的修練の臨床適用」、「プリスクリプティヴ・ミュージック」及び「ミュージック・ヴィジル」を確認した。

第10章は、「プリスクリプティヴ・ミュージック」に焦点を当て、それが患者その人のニーズに応じて、その人のために詠えられた音の調合薬であり、また音を調合し音楽として生み出す行為そのものであることを確認した。つまり、「プリスクリプティヴ・ミュージック」は、死に対して精神的に準備し、人生全体をより実り豊かなものに再統合するために、傍で支える「全体的統合」ということになる。

第11章は、「観想的修練」に焦点を当て、①他者に「仕える」姿勢、②「死に逝く人」を見るスタンス、③「関わる」ための音楽精神を検討した。また「メタノイア」（習慣的に無自覚に身につけてしまった考え方や在り方を剥ぎ取ること）、そのための「ファイン・チューニング」について検討した。

結論では、「ミュージック・サナトロジー」の特殊性を整理し、本研究の課題である「音楽経験を通じたスピリチュアルケア」の地平を示した。「ミュージック・サナトロジー」は、死に逝くことに伴う痛み・苦しみを取り去るのではなく、むしろそれを私たち人間の根源的な徴と捉え、「共にある」ことの崇敬さ・親しさを現代社会に訴えている。

今後の課題としては、「音楽経験を通じたスピリチュアルケア」の実践的な展開、社会システム及び制度に関する面も含めた実践研究、ケアに携わる人への観想的教育の研究など、包括的に取り組んでいくことが示された。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、緩和ケアの一領域である「ミュージック・サナトロジー (music-thanatology)」の検討を通して、「死に逝く人へのケア」における「音楽経験」が持つ意味を問い直した研究である。「ミュージック・サナトロジー」は、終末期のベッドサイドに寄り添い、ハーブの音と歌声を通して、死に逝く者とその家族のニーズに応えようとする臨床実践であり、1970年代、ホスピス運動と同時期に米国で始まった。

従来、「死に逝く人へのケア」と「音楽経験」の関連はほとんど検討されてこなかった。「ミュージック・セラピー」は死に逝く者を視野に入れることが少なく、他方、「スピリチュアルケア」は音楽経験に注目することが少なかった。その意味において、死に逝く者へのケアを「音・声・ひびき・音楽」との関連で検討した本研究は、きわめて独創性の高い研究と評価された。

本論文の優れた点は、以下の三点である。

1) 先行研究がない中、ミュージック・サナトロジーに注目し、多角的な視点から総合的に検討した点。とりわけ、著者本人が、その実践者として、ベッドサイドでハーブと歌声によるケアを積み重ね、その経験(参与観察)を通して、この臨床実践の意味を解明した点は貴重である。

2) その思想的源泉を11世紀フランスの「クリュニー修道院」の「死の看取りの慣わし・儀式」と確定し、詳細に検討した点。例えば、死に逝く修道士の傍らに皆が集まり、慣れ親しんだ聖歌を口ずさむという仕方で看取る儀式が、今日のミュージック・サナトロジー臨床実践の原点となっていることを明確に論証した。

3) その思想の特徴と方法論を確定した点。ミュージック・サナトロジーの創始者(Schroeder-Sheker, Therese)は実践者であり、体系的にその思想を展開したわけではなかった。本研究は、その言説を丁寧に読み拓き、要点となる用語を特定し、ミュージック・サナトロジーの思想と方法を体系的に整理した。例えば、死に逝くその人の個別的状況に合わせてライブの音(ハーブと声)を響かせること(prescriptive musicと呼ばれる)。あるいは、死に逝く人と内面的につながるために、ケアする者に必要な「観想的な contemplative 修練」、またそのために重要な「メタノイア metanoia (習慣的に身につけている考え方を剥ぎ取っていくこと)」など。死に逝く人の傍に居て、その時その人のニーズに仕え応答するための「音・声・ひびき・音楽」の工夫。「ミュージック・サナトロジー」はその総合的な方法であり思想である。

以上のように本研究は「ミュージック・サナトロジー」という新たな臨床実践に関する初めての総合的研究として評価されるが、さらに、この実践に含まれる「人間存在の根源に立ち返る視点」も重要であり、試問において、高く評価された。「死

に逝く人の床に臨む」という、言葉の本来の意味における「臨床」の場において、「音・声・ひびき・音楽」が人と人をつなぎ、人と神をつなぐ、あるいは、痛みを取り去るのではなく痛みの意味を取り戻すという視点など、臨床教育学にとってきわめて重要な問題提起を行っている」と評価された。

なお、試問においては、論文の文体が内向きであること（モノローグ傾向）が指摘され、自らが前提とする信念を対自化する工夫の不足、そのための概念装置の必要などが指摘されたが、こうした課題は、今後のさらなる発展に向けた指摘であり、本論文の価値をいささかも下げるものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成29年6月28日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、(期間未定)当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： _____ 年 _____ 月 _____ 日以降